



障害者ケアマネジメントについて あらためて学ぼう



小倉祇園太鼓の音を遠くに聞きながら、第 181 回障害者地域生活支援研究会が 7 月 18 日に開催されました。今回のテーマは『障害者ケアマネジメントについて あらためて学ぼう』です。

今回は、北九州市障害者自立支援協議会 地域ネットワーク部会 部会長である 大分大学教育福祉科学部 大学院福祉社会科学部 教授 衣笠 一茂さんに、『地域で安心して生活できるネットワークのあり方 “今、地域の中で何が起きているのか？”』をサブテーマに、2つの事例を具体的にご紹介頂きながら、フロアの参加者の皆さんと一緒に“障害者ケアマネジメント”について学びました。

1 事例目として、東京の親子が餓死した事例を当時の新聞記事を元に紹介していただきました。「なぜ、親子が餓死するに至ったのか」「本当に救う手立てはなかったのか」等、様々な意見や質問がフロアから出されました。

2 事例目として、大分の高齢の姉と障害のある妹が地域社会から孤立していた事例を紹介していただきました。支援を求める術も知らずに生活していた姉妹に関係者・機関が上手に係わりながらフォーマル・インフォーマルの支援が入り、最終的には地域の中で安心して生活していけるようになった過程を図解で分かりやすく紹介していただきました。

“ケアマネジメント”は様々な意義・目的で捉えられますが、公的サービスを単に導入・提供するだけではなく、対象者の方のニーズと地域の社会資源全体のネットワークを関係調整・構築していくことが、一番の根幹であることを皆さん理解して頂いたことと思います。

東京の事例では、母親の日記から母親が区役所に助けを求めて行った時のやり取りが読み取れます。母親は生活保護を申し出ますが、担当者は悪気なく“生活保護は最後のセーフティネット”だからと説明し、母親には「老人ホームへの入所」、障害のある息子には「障害者施設への入所」を勧めます。しかし母親は支援を拒み、『誰にも自分たちの苦しみをわかってもらえそうにない。私と子供は別々に暮らしてはいけない。今後どうなるのか不安でたまらない。今の生活のままで、“息子と一緒に”に死なせて頂きたい』と日記に記し、それ以降誰にも助けを求めることはありませんでした。

このことから“サービスありき”で考えると、生活を支えるはずの制度やサービスが“生活を追いこむことがあること”と、生活は“制度だけでは支えられないこと”を関係者・機関が理解・再確認し、“関わり合いの意義、関係性の意味”を、もう一度考える機会にして欲しいとのことでした。

更に「(障害者) ケアマネジメント」とは、雨露しのげて、トイレに行けて、風呂に入り、食事ができる。という ADL の部分だけに着目していくのではなく、“その人を地域(社会)の中で置き去りにしない”“自己の存在を認められる社会であること”等の肯定的な関係性の視点を持たなければ、本当の意味の生活支援にならない。その関係性の視点を基礎にケアマネジメントを考えよう」とのことでした。

最後に「今後は“地域で安心して生活できる”地域のネットワーク作りのため障害の有無に関わらず生きづらさを抱えている人に対して関心を持ち、実際の具体的な問題に気付き、支援者・機関の連携・協力体制の構築やあり方、事例検討等で学んだことを地域に還元していく機会をもちたい。」と締めくっていただきました。

本日は 24 名の新規の方を含め、82 名の方にご参加頂き、「事例を元にして頂いたため、わかりやすかった」「今日のお話を今後の支援につなげていきたい」等、ご意見や感想をたくさん頂きました。ありがとうございました。



【東京・池袋 親子餓死】
 1996 年 4 月。東京都池袋のアパートの一室で 77 歳の母親と 41 歳の息子が死んでいるのが見つかった。二人は約 1 ヶ月前に栄養欠乏症で死亡していることがわかった。部屋には母親の書いた数十冊の日記が残されていた。
 「二十八円だけ残しているが、これでは何ひとつ買えない」「不安でたまりません。何卒お助け下さい、お願いいたします。」と切々と綴られている。
 誰に宛てたわけでもないと思われるこの日記は『池袋母子餓死日記 覚え書き 全文』として発刊されている。



※こちらの議事録は北九州市障害者自立支援協議会のホームページでもご覧いただけます。
<http://kitakyushu-net.shien-c.com/>

「地域ネットワーク部会」ってな～に?!
「障害を持つ人を『置き去りにしない』地域づくり」を今年度からの目標にして地域環境の整備を目指している部会だよ